

静弾性学に於ける諸ポテンシャルの境界値について

京大工 正 小林 昭一
京大工 正 西村 直志

1 序

積分方程式法を用いる場合、諸ポテンシャルの境界値を求めねばならない事がある。本報では定数係数楕円形2階偏微分作用素について各ポテンシャル、及びその境界値を求める。特に方程式の主部のみを考へて、表題の如く静弾性学のポテンシャルを扱ふと考へて差支ない。なお考へる曲面 S は十分滑らかなものとする。空間は N 次元($N=2$ or 3)とする。

2 準備, 及び問題設定

本報では、 (m, n) 齊次関数なる概念を用いる。即ち、 $f(x)$ が (m, n) 齊次関数であるとは、 $f(\lambda x) = \lambda^m |\lambda|^n f(x)$ ($\lambda \in \mathbb{R}$ キ 0) となる事を意味する。この用語によれば、 $(n, 0)$ 齊次関数の子変換は $(-n, -N)$ 齊次関数になる。ただし $-N < m < 0$ 。

さて、静弾性学の作用素 $\Delta^*(\nabla)u := \operatorname{div}(C \cdot \nabla u)$ (C : 弾性常数) の基本解、即ち $\Delta^*(\nabla)\Gamma(x) = -1 \delta(x)$ (1 : 単位テンソル, $\delta(\cdot)$: Dirac delta) なる解 Γ は、子変換を施せば $\tilde{\Gamma}\Gamma = \hat{\Gamma} = \Delta^{*-1}(3)$ となる。ここに $\tilde{\Gamma}$ は子変換のパラメータである。 $\Delta^{*-1}(3)$ は $(-2, 0)$ 齊次である。従つて $\tilde{\nabla}\Gamma, \nabla\tilde{\Gamma}$ は各々 $(-1, 0), (0, 0)$ 齊次である。一般に、ポテンシャルとしては一重層 $\int_S \Gamma(x-y) \varphi(y) dS_y$, 二重層 $\int_S (\tilde{\nabla}\Gamma)(x-y) \varphi(y) dS_y$ ($\tilde{\nabla}u := (C \cdot \nabla u)n$) 及びそれらの微分を考へておけば実用上十分であるので、以下次の問題を解く事を考へる: $\int_S F(x-y) \varphi(y) dS_y$ に於いて $x \rightarrow x_0 \in S$ とした時の極限値を求める。ここに F は $\hat{F}$ が $(n, 0)$ 齊次である ($-2 \leq n \leq 0$) 核である。

3 解答

i) $n = -2$ の場合, $N = 3$ では2で述べた様に F は $(2, -3) = (0, -1)$ 齊次, また $N = 2$ では一般に $|F(x)| \leq C_1 + C_2 |\log |x||$ となる事が知られており¹⁾ (C_1, C_2 : 定数), いずれにせよ S 上一般可積分だから、求める極限は $\int_S F(x_0-y) \varphi(y) dS_y$ ($x_0 \in S$) となる。

ii) $n = -1$ の場合, F は $(1, -N)$ 齊次である。従つて F は点 x_0 近傍以外では普通の「関数」である。そこで、以下点 x_0 の近傍のみを考へる事にする。この近傍を十分小さく取れば、これを x_0 に於ける S の接平面に置換しても良いであろう。以下、 x_0 を原点とする n (弦線) 方向を x_N 軸とする Cartesian 座標を用いる。まず次の部分子変換を導入する:

$$\hat{F}(z_N | x_N) = \frac{1}{2\pi} \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{-\infty}^{\infty} e^{i z_N x_N - \epsilon z_N^2} \hat{F}(z_N, z_N) dz_N,$$

ここに $e^{-\epsilon z_N^2}$ は収束因子である。 $\hat{F}$ が $(-1, 0)$ 齊次である事を考慮すれば、この積分は次の様に評価される: $(\hat{F}(z_N) - \hat{F}(0, 1))/z_N$ は z_N に関して $O(1/|z_N|)$, $|z_N| \rightarrow \infty$ である事に注意.)

Shoichi KOBAYASHI & Naoshi NISHIMURA

$$\hat{F}(\xi_\alpha | x_N) = \frac{i}{2} \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix} \hat{F}(0, 1) + v.p. \int_{-\infty}^{\infty} (\hat{F}(\xi) - \frac{\hat{F}(0, 1)}{\xi_N}) e^{i \xi_N x_N} d\xi_N,$$

ニに (:) は, 上, 中, 下 各々 $x_N > 0, = 0, < 0$, v.p. は主値を示す. それゆえ

$$\lim_{x_N \rightarrow 0} \hat{F}(\xi_\alpha | x_N) = \pm \frac{1}{2} \hat{F}(0, 1) + \hat{F}(\xi_\alpha | 0) \quad (\text{複号は上, 下 各々 } x_N > 0, < 0 \text{ からの極限})$$

となる. 特に $\hat{F}(\xi_\alpha | 0)$ は ξ_α について $(-1, 1)$ 齊次であり, 従って $F(x_\alpha, 0)$ は x_α に関する $N-1$ 次元超関数として主値積分となるので, Invariant な表示として次式を得る:

$$\lim_{\substack{x \rightarrow x_0 \\ x_N > 0}} \int_S F(x-y) \varphi(y) dS_y = \pm \frac{i}{2} \hat{F}(n) \varphi(x_0) + v.p. \int_S F(x_0-y) \varphi(y) dS_y. \quad (1)$$

iii) $n=0$ のとき, ii) と同様にすれば次の結果を得る:

$$\lim_{\substack{x \rightarrow x_0 \\ x_N < 0}} \int_S F(x-y) \varphi(y) dS_y = \pm \frac{1}{2} \sum_{\alpha=1}^{N-1} \frac{\partial}{\partial \xi_\alpha} \hat{F}(\xi) \Big|_{\xi_N=0} \frac{\partial \varphi(x)}{\partial x_\alpha} \Big|_{x=x_0} + p.f. \int_S F(x_0-y) \varphi(y) dS_y, \quad (2)$$

ニに p.f. は有限部分を示し, 今の場合には

$$p.f. \int_{R^{N-1}} F(x_\alpha, 0) \varphi(x_\alpha) dx_\alpha = \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \left[\int_{R^{N-1} \setminus B_\epsilon} F(x_\alpha, 0) \varphi(x_\alpha) dx_\alpha - \frac{\varphi(0)}{\epsilon} \int_{S^{N-1}} F(x_\alpha, 0) dS \right]$$

である. また B_ϵ は原点中心半径 ϵ の球, S^{N-1} は $N-1$ 次元単位球面を表わす. なお $F(x_\alpha, 0)$ は x_α について原点以外で $(0, -N)$ 齊次関数である. 従って対称性から p.f. の存在条件

$$\int_{S^{N-1}} F(x_\alpha, 0) x_\alpha dS = 0, \quad 0 \leq \alpha \leq N-1$$

が満たされている事がわかる.

4 応用

次の諸結果は式の, ④ から直ちに出来る. これらは等方性, 異方性に関らず成立する:

$$\lim_{\substack{x \rightarrow x_0 \\ x_N > 0}} \partial_i \int_S \Gamma_{jk}(x-y) \varphi_k(y) dS = \mp \frac{1}{2} n_i \Delta_{jk}^{*-1}(n) \varphi_k(x_0) + v.p. \int_S \partial_i \Gamma_{jk}(x_0-y) \varphi_k(y) dS_y, \quad (3)$$

$$\begin{aligned} \lim_{\substack{x \rightarrow x_0 \\ x_N < 0}} \partial_i \int_S (\tilde{T} \Gamma)_{jk}^T(x-y) \psi_k(y) dS_y &= \pm \frac{1}{2} \sum_{\alpha=1}^{N-1} (\delta_{i\alpha} \frac{\partial \psi_k}{\partial x_\alpha}(x_0) - n_i \Delta_{jm}^{*-1}(n) C_{msk\alpha} n_s \frac{\partial \psi_k}{\partial x_\alpha}(x_0)) \\ &+ p.f. \int_S \partial_i (\tilde{T} \Gamma)_{jk}^T(x_0-y) \psi_k(y) dS_y. \quad (x_0 \in S) \quad (4) \end{aligned}$$

特に S が D の境界 ∂D , ψ, φ が D 内の $\Delta^*(D) u = 0$ を満たす場合 u の境界値, 及び $\tilde{T} u$ の境界値に等しい場合, 式③, ④, 及び Green 公式から $x_0 \rightarrow x_0$ の近づき方にかかわらず

$$0 = -\frac{C_{pqij}}{2} + v.p. \int_S C_{pqij} \partial_i \Gamma_{jk} \tilde{T} u_k dS - p.f. \int_S C_{pqij} \partial_i (\tilde{T} \Gamma)_{jk}^T u_k dS \quad \text{on } S \quad (5)$$

を得る. 式⑤は $N=3$ の等方性の場合, 文献②に於いて直接計算により得られている. しかし上の様にして, 一般の異方性の場合も同様通り正しい事がわかる. この様にほとんどの極限計算は基本解を陽に求めなくても実行可能である.

文献 1) 斎田茂: 偏微分方程式論, 岩波, (1965), 2) Cruse, T.A. & Van Buren, W.: Int. J. Fracture Mech., 7, (1971).